
鈴の音

中さん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴の音

【Nコード】

N1414X

【作者名】

中さん

【あらすじ】

霊力のある双子の春美^{かずみ}と春恵^{かずえ}が新たな地で悪霊退治！！親類どころか村中を巻き込む死闘が始まる。
喜びあり哀しみありの物語。

引っ越してきた双子

「よいしょっ、よいしょっ」

「大丈夫？春美ちゃん。」

「大丈夫だよ、春恵ちゃん。」

双子の姉妹は大きな荷物を持って、新しい家に向かっていった。

春恵「もうっ、何でこんなに遠いの！？」

春美「もうちよつとだから…」

橋を渡ったところで、同じ年位の男の子が話しかけてきた。

「あんたらが春美と春恵？」

「？」

2人は首を傾けた。

すると男の子は2人の返事を聞かずに、2人の荷物を持って行つた。

春恵「ちよっ！」

春美「春恵ちゃん、どうやら彼はお世話になる宇宙さんの家族の方の
様よ。」

春恵「え！？」

春美「ついていきましょう。」

春恵「え〜！」

春美は嫌がる春恵を引きずって行つた。

長い山の道を歩いて行くと、大きな歴史ありげな家が見えてきた。

春恵「すげえー、デカっ！」

春美（ここ、見覚えがある…？）

「何してるんの？早く中に入れば？」

男の子はすぐに中に入って行つた。

宇宙家

「いらつしゃい、よくきたねえ。」

家の奥から2人の祖母、松子まつこが出てきた。

「おばあちゃん！」

2人はこの家に来るのは初めてだが、松子とは小さい時からよく会っていた。

松子「2人とも疲れただろう？冷たいお茶を用意しているよ。」

春恵「やったあー」

2人は家にあがった。

松子「2人の荷物は部屋に置かせたよ。部屋は、この廊下を真っ直ぐ行つたところの階段の前の部屋だよ。」

2人は松子にリビングに案内された。リビングは二階にあり、途中に部屋の間所も聞いた。

リビングに入るとそこには、さつきの男の子ともうひとり男の子と女の人がいた。

松子「2人の叔母の乙葉おちはと、もうひとりの叔母の紅葉こうはの子供達、涼介りょうけと光輝こうけだよ。」

乙葉「この子達が私の姪の春美ちゃんと春恵ちゃん？さつすが双子、そっくりね。」

「。。。」

乙葉「私は乙葉、よろしくね。」

涼介「僕は涼介だよ。いとこ同士仲良くしようね。」

「は、はいっ。」

光輝「。。。」

光輝は何も言わずにリビングから出ていった。

春恵「さつきの…。」

涼介「あの子が光輝。」

乙葉「こうちゃんは、少し照れ屋なのよっ。」

涼介「あんまり気にしないでね。」

「うん…。」

2人はうなずいた。

松子「乙葉、紅葉や吉ちゃん達を知らないかい？」

乙葉「さあ。買い物にでも行ってるんじゃない？」

松子「そうかい…。じゃあ、紅葉達は昼食の時に紹介するのでしょうか。2人はそれまで部屋でゆっくりしているといいよ。」

「はい。」

2人が返事をする、松子も部屋から出ていった。

―昼食時―

2人は涼介に案内されて、別館の二階のダイニングルームに行った。そこには、乙葉と光輝以外に6人いたので、2人とも緊張した。

乙葉「奥から順に、2人の叔母兼私の姉の紅葉。次に母さん…おばあちゃんの妹の孫家族の道子さんと拓也さんと、2人の子供の拓真くんよ。」

春恵（ひ孫！？）

乙葉「こっちが、道子さんのいとこの吉長よしながさんと加帆かほちゃんよ。」

春恵（ホントに大家族だよ！）

乙葉「おばあちゃん、別で妹の梅子うめこさんと梅子さんの夫の吉男よしおさんの3人で食べてるのよ。」

春美「すごい大家族ですね。」

乙葉「そうね。」

春美「ご迷惑をかけないように、頑張ります！春美と春恵ですつよろしく願います。」

春美はお辞儀をすると、続いて春恵もお辞儀をした。

加保「やだ、そんな固くならないで！！仲良くしましょ？」

加保の言葉に、2人の緊張はとけた。

祠（ほくら）

昼食中、加帆が積極的に話しかけてくれて、食卓はにぎわった。

加帆「あ、そうだ！

ごはん食べ終わったらみんなで、村の散歩に行こうよ！」

涼介「そうだね。この村には古い神社とか遺跡（？）みたいな建造物が多いから、楽しんでもらえると思うよ。」

春美「おもしろそう♪」

春恵「うん。」

加帆「決まりねっ！

各自準備したら、玄関に集合ね！」

『はいっ！』

2人は元気よく返事した。

昼食を終えるてしばらくすると、乙葉・涼介・吉長・加帆・道子・拓真の6人と春美と春恵の2人が玄関に集まった。

加帆「じゃあ、出発！」

8人は元気よく家を出た。

まず8人は山道を登り、土地神を祀る神社に参拝した。

涼介「ここの神様は、この村が豊作に恵まれるように見守っているんだよ。」

春美「春恵ちゃん、お世話になる土地神様なんだから、ちゃんとあいさつしなくちゃね。」

春恵「だね。」

2人は手を合わせた。

涼介「…？」

その2人の姿に、涼介は何かを感じた。

参拝を終えると、つぎは山の中腹の祠ほくらに行った。

涼介「この村には、古い祠が4つ東西南北にあり、昔この山にいた悪霊を封じていると、伝わっている。」

加帆「そうじゃなくても、こちら辺は道がややこしいから、迷ったら大変なの。だから2人だけで祠には行かないでね。」

「…はい」

加帆「この祠は”北の首”(きたのしゅ)と言うのよ。”南の首”(みなみのしゅ)はあっちの方向にある大樹の根元にあるの。”

東の首”(ひがしのしゅ)はむこうのバス停のところに、そして”西の首”(にしのしゅ)はこっちの小学校の校庭にあるわ。」

春恵「そういえば、バス降りたら祠っぽいものあったね。」

春美「うん。」

加帆「それが東の首よ。」

「へえ」。

すると乙葉は話に飽きたのか、突然話に入ってきた。

乙葉「…祠の説明は終わるとして、みんな、暑くない？」

そう言っただけで乙葉は8人を無理矢理村のはずれにある唯一のスーパーにつれて行った。

壊された封印

スーパーに行った8人は、乙葉のおごりでアイスを買って食べた。

乙葉「んーっ！ー！うまつー！ー！」

春恵「うんうんうん！」

拓真「お母さん、もつともつと！」

まだ3歳の拓真は、母道子と2人で1つのアイスを食べていた。

道子「だめよ、お腹壊しちゃいますよ。」

拓真「もつともつと」

拓真のおねだりは続いた。

乙葉「たくちゃん欲しがってるんだから、もつとあげればいいのに
……。」

道子「乙葉ってばあ……。」

涼介「乙葉さん、拓真を甘やかしすぎると、またおばあちゃんに怒られますよ。」

乙葉「別にいいじゃない。おいしいんだから……。」

涼介は乙葉の甥っ子なのに、乙葉のお兄さんみたいだった。

春美「ねえ、春恵ちゃん。さっきの祠だけど、どう思う？」

春美がこっそり聞いてきた。

春恵「どうって……？」

春美「悪霊を封印って……。」

春恵「ああ……。私は何か嫌な感じがした。」

春美「やつぱり？春恵ちゃんも思ったんだ。」

春恵「春美ちゃんも！？」

春美「何か……」

そこに涼介が話に入ってきた。

涼介「やつぱり2人は感じるんだね。」

『……？』

ドッ！

その時、一瞬大きな揺れが起こった。

ドドドドドドドド...

まるで地面の底から込み上げてくるかのように、揺れが大きくなった。

『何！？』

スーパ―の中は大きな揺れで、陳列だなが倒れてきたり、屋根がはがれ落ちてきたりして、めちゃくちゃになっていった。

道子「みんな、ここは危険よ！

ガラスに注意して外に！！」

道子の指示で、8人は外に出た。するとさっきまでいたところに屋根がはがれ落ちてきた。

加帆「間一髪...。」

春美「！？」

春美はひとり、山の方を見た。

春恵「春美ちゃん、どうしたの？」

春恵の言葉で、みんなは春美を見て山を見た。

『！？』

すると山の方の祠がある辺りから、天空に真っ直ぐと光が伸びていった。

加帆「みんな、あっちも...。」

加帆がみたのは、他の祠の方から天空に真っ直ぐと伸びる光だった。

ゾクッ

『！？』

その時、春美と春恵だけでなく、涼介・加帆・乙葉・吉長・道子も、背筋が凍りつくような何かを感じた。春美（これは...邪気！）

春恵「春美ちゃん？」

春恵は、黙っている春美を心配した。

加帆「あ...、おばあちゃん達がまだ家に！」

吉長「先に戻ってるぞ！」

吉長が一番に走りだし、誰よりも早くに家に戻っていった。

加帆「待って！」

加帆も吉長を追った。

道子「涼介くん、私たちも家に…」

涼介「うん、2人もついてきて！」

春恵「はいっ！」

道子は拓真を抱いて、走り出すと涼介と春恵も走り出した。

春美（春恵ちゃん！！）

春恵（？）

春美は春恵を心で呼び止めた。

春美（私達は、あっちへ行くわよ！）

春恵（うん…？）

春美と春恵は別の方向に走って行った。

涼介「！？」

それに涼介は気がつき、道子を先に行かせ、2人を追った。

春恵「どこに行くの！？」

春美「祠のそこっ！」

春恵「何でっ？」

春美「行けばわかるよっ！」

2人は山道も休まずに走った。

春恵（！）

春恵は止まった。

春恵「春美ちゃん待って！」

春美「？」

春美は振り返った。

春恵「何か聞こえない？」

春美「…。」

2人は耳を澄ませた。

ゴゴゴゴ...

涼介「2人ともこっちに来て！」

涼介が2人に追い付いた。

「涼介くん！？」

涼介「この音は土砂が崩れる音だ！」

「！？」

2人は涼介のいる場所に走った。

ドゴォー

移動した直後、土砂が木々と崩れて行った。

「...！？」

土砂の中に、さっきまでいた北の首の祠が流れていった。

涼介「祠が...」

これは、祠の封印が解けたことを示していた。

呪われし村

”た…ま……を…た…！”

祠が2人の目の前を崩れ落ちるとき、春美は声を聞いた。

春美「何…？」

春恵「春美ちゃん？」

”助け…ま…を助け…！”

春美「っ…！？」

声は大きくなり、春美は頭痛に襲われた。

春恵「春美ちゃん！！」

涼介「…。」

春美は立つていられなくなり、気を失った。

春恵「春美ちゃん、春美ちゃん！？」

春恵は春美の体を左右に揺さぶったが、春美は目を覚まさなかった。

ーひとつ、

伝説の雪女が甦るー

気絶した春美の頭にその言葉が響いた。

春美「ん…？」

春美は部屋で目を覚ました。

春恵「よかった…目が覚めて。」

春美「あれ…？部屋…か。」

春美の隣には、春恵がいた。

春恵「あの後、気絶した春美ちゃんを涼介くんが運んでくれたの。」

春美「…………。」

春恵「みんなはダイニングに集まってるよ。」

春美「ああ…。」

春美は軽く返事をした。

春恵「…？」

春美（一ひとつ、伝説の雪女が甦るーって…何だったの？）

春美の頭の中は、その声の事で一杯だった。

春美と春恵は、とりあえずダイニングに行った。

春美「クシュッ…」

春美はくしゃみをした。

春恵「大丈夫？夏風邪？」

春美「何だか寒い気がする。」

春恵「…確かに。」

ダイニングに行くと、乙葉・涼介・光輝・松子・道子・拓也・拓真・吉長・加帆がいた。

春恵「あれ？梅子おばあちゃんと吉男おじいちゃんと紅葉叔母さんは…？」

乙葉「吉男さんがさっきの地震で腰をいわして、病院に行ったの。」

梅子おばあちゃんと紅葉叔母さんは、付き添いよ。」

乙葉は2人を見た。

涼介「何事もなければいいんだけどね…。」

春美「…そうですね。」

あの…祠の封印って、どうなったんですか？」

涼介「壊されてしまったよ。」

春美「これから、大変な事になるでしょうね。」

春恵「春美ちゃん、何か感じる？」

春美「うん。村中から異様な気配を感じるわ。」

春恵「やっぱり…。」

涼介は2人を見た。

涼介「君たち2人は霊力の持ち主なんだね。」

『はい。』

乙葉は2人を見た。

乙葉「2人とも!？」

『はい。』

涼介「祠の封印をしたのは宇宙家だ。だから宇宙家にはよく靈力を持つ者が生まれる。

僕や乙葉さん、吉長くんとか…。

代々宇宙家には、封印を守る当主がいて…。」

乙葉「それが涼介くんってわけ。」

『!？』

涼介「…あのね、封印の話はまだ続きがあるんだ。封印したのは悪霊だけじゃないんだ。」

突然涼介の雰囲気が変わった。

涼介「悪霊の他に、雪女・鬼・河童・天狗も封印してるんだ。それぞれが村で悪さをしてたのを、先代が封印したんだ。」

春恵「そんなモノが…。」

春美「そんな…。」

その時だった。

吉長「みんな大変だ!!外を見る!!！」

吉長が窓の外を見て叫んだ。

始まり

全員は吉長の叫びで外を見た。
外は一面雪景色になっていた。

春恵「今は真夏なのに…。」

加帆「どうして雪が降ってるの!？」

ーゾクッ

春美は寒気がした。

春美「ーひとつ、伝説の雪女が甦るー」

春美はあの言葉を口にした。

涼介「春美ちゃん、今の…何？」

春美「夢に出てきた言葉です。」

涼介「…。」

春恵「あ、女の人がいる!」

春恵は川の方を指差した。

加帆「何？」

…誰もいないじゃん。」

春恵「いるよ!」

加帆「何も見えないわよ。」

春恵「え…?」

「あれは雪女。だから霊力のない者には見えないのよ。」

「!?!」

突然部屋の中から声がしたので、春美と春恵と涼介と乙葉と吉長は、振り返った。その声は、春美が夢で聞いたものだった。
そこには幼い女の子がいた。

「もちろん、霊力のない者には私も見えてないの。」

春美「あなたは誰？」

「私は桜子。みんなにお願いがあつて来たの。」

春美「お願い？」

すると加帆が春美に気づいた。

加帆「えっ…何と話してるの!？」

春美「ここに女の子が…。」

加帆「やめてよ、気持ち悪いっ!!」

何なのよ…女の子？雪？

これも霊力があるから？嫌っ!!」

吉長「落ち着け、加帆。」

吉長は加帆をなだめた。

桜子「まずひとつ、あなたの力を貸して…？」

桜子は手を出した。

春美「私の…？いいわよ。」

春美は桜子の小さな手に、自分の手を重ねた。

ーフワッ

春美の手から桜子の手を通して、霊力が流れた。

桜子「ん…ん…っあ!!」

桜子の体は春美の力で満たされた。

加帆「えっ…!？」

光輝「女の子が…現れた？」

松子「…。」

春美の霊力があり、霊力のない者にも女の子が見えるようになった。

松子「あ…。」

桜子は松子を見た。

桜子「久しぶり、松子。」

松子「さ、桜子…。」

すると、涼介が思い出した。

涼介「思い出した!？」

桜子「宇宙桜子といえば、宇宙家最強の霊能力者。

そして、松子おばあちゃんの妹。」

『えっ!!』

2人は驚いた。

桜子「そんなに驚かないで。生きていれば、あなたたちと同じ、霊力の持ち主なんだから。」

桜子は笑った。

松子「何で桜子が今に…。」

桜子「私はね、今までずっと伝えたかったの。

でも、私を存在させるほどの力を持った者はなかなか現れなかった。でも、今日は春美ちゃんのおかげでみんなに姿を見てもらうことができたわ。ありがとう。」

春美「い、いえ…。」

涼介「伝えたかった事って?」

桜子はみんなを見た。

桜子「みんな、早くこの村から出ていきなさい。これからは、この村が地獄とかすから。」

春恵「どーゆー事?」

桜子「封印よ。4つのうち1つの封印が解けた。あと3つの封印が解かれるのも時間の問題なの。」

だから、完全に封印が解かれる前に、みんなにはこの村から出ていって欲しい。」

涼介「そんな…封印が解かれるなんて…。」

桜子「封印がされてから早200年。いくら封印した者がすごい霊力者であっても、人間に代わりない。限界位すぐ来る。」

全ての封印が解かれてからじゃ遅いのよっ!!」

桜子は叫んだ。

涼介「…わかった、この村に残った人間を外にだそう。」

春恵「外って…?」

その時だった。

ーフッ
…

雪女がこの家にいる霊力者に気づき、中に現れた。

雪女

雪女「人間…見つけた。」

春美「雪、女…。」

部屋内の空気が凍えた。

加帆「えっ、今度は何!？」

松子「一体…?」

霊力のない者には、その姿は見えなかったが、何かそこにいるのはわかった。

桜子は霊力のない者たちを守るように、前に立った。

ーピト…

雪女は涼介の手を触った。

涼介「冷たっ!!」

雪女「…温かい。」

春美「あなたは誰?雪女さんだよね?」

雪女「そう、私は雪女。200年ぶりに起きちゃった。」

春美「私は春美。ねえ…今は夏だから、まだ出てきちゃだめよ。」

雪女「やだよ。私、人間の言うことなんて聞かないんだからっ!!」

春美「えっ…どうして?」

雪女「私、人間嫌いだもんっ。」

春恵「は?」

春恵は少し強ばった言い方をした。

雪女「…。」

雪女は春恵をにらんだ。

春美「春恵ちゃんっ!」

春美は春恵の袖を引っ張り、黙らせた。

春美「…どうして人間が嫌いなの?」

雪女「人間は勝手過ぎるっ

私たち雪女や雪男たちは、山で静かに雪を降らせて暮らしてただけなのに、人間は何もしてない私たちを”ただ存在が怖い”というだけで封印した。

その際に、お母さんやお父さんやお姉ちゃん、お兄ちゃん…他の仲間たちは、みんな人間に抵抗して殺された。」

「…そんな。」

雪女「封印されてから200年、山を、自然を破壊してるのは人間じゃないか！

私にとつちや、人間の方が怖いね。」

涼介「…。」

涼介は初めて知った雪女の怨みを聞いて、何も言えなかった。

春美「…だから、

仕返しするの？人間に…。」

雪女「そうよ！みんなの仇を私が討ってやるんだからっ！！」

春恵「な…。」

雪女「人間は全員凍え殺す！」

雪女の冷たく青く氷のような瞳が雪女の恐ろしさを醸し出していた。

雪女「…でも。」

すると、雪女の瞳は優しくなり、春美を見た。

雪女「…でも、春美だけは助けてやってもいい。」

春美「…なぜ？」

雪女「あなたは特別だからね。」

春美「…？みんなは助けてくれないの？」

春美は聞いた。

雪女「助けないに決まってるでしょ！助けて何の得があるの？」

春美（私には得がある…？）

雪女「それ以前に、雪女が人間を助ける事なんてない。」

春恵「でも春美ちゃんだけは助けるんだ。」

雪女「まあね。」

雪女は勝ち誇ったように、腰に手を当てた。

春恵「言ってる意味わかんないし!!」

すると雪女は、みんなから身を引いた。

雪女「お前たち、よく聞け!!」

こんな村、私が1日でぶっ潰す!覚悟しな!!」

そう言うと、雪女は吹雪と共に消えた。

脱出

乙葉「何、今の…。」

春恵「まるで、今から戦いが始まるみたい。」

春美「みたいじゃない。始まるのよ。」

加帆「えっ何！？何が起こったの？」

松子「説明しておくれ。」

拓也「さっぱりわからん。」

霊力のある者は戸惑い、霊力のない者は状況がわからず慌てた。

道子「一体何があったの？」

すると、春美は頭の整理ができたのか、何もわからない人たちに、状況を説明した。

春美「今さつき、雪女から宣戦布告を言い渡された。」

村を潰すーと…。」

加帆「えー!!」

道子「…。」

拓也「何!？」

松子「本当にかい?」

桜子「うん。」

松子「…。」

全員は、当主である涼介の判断を待った。

涼介「…、さつきに言ったように、この村に残った人たちを外へ逃がそう!!」

春恵「外へ…。」

涼介「でも、誰かがここに残らなければならない。」

『何で?』

涼介「まず、誰かが村を見渡せる所に残り、敵の雪女の動きを見張らなければならない。」

春美「そうね、雪女が襲ってくるかもしれない…。」

涼介「そういうこと。」

次に、今邪気が村から出ないように張られている結界に穴をあけて、その穴を維持する者が残らなければならない。」

春恵「2人…。」

乙葉「じゃあ、どちらも霊力が必要なわけね。」

すると、春美は手を挙げた。

春美「私が残るわ!」春恵「春美ちゃん…、なら私も。」

涼介「だめだ!! 宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはいかない。」

春美「何を心配してるの?

もう十分巻き込まれてる。」

涼介「でも、危険だ!」

春美「大丈夫です。私、そんなに弱くない。」

涼介「でも…。」

すると乙葉が入ってきた。

乙葉「私が春美ちゃんの代わりに残るわ!」

涼介「乙葉さん!?!」

乙葉「私が見張りをやる。」

涼介は結界を維持して。

吉長くんはみんなの移動を!」

春美「でもっ!」

乙葉「涼介が言うように、宇宙家以外の人間を巻き込むわけにはいかない。2人はみんなと一緒に村を出て!」

春美「…わかりました。」

春恵（春美ちゃん?）

あの諦めの悪い春美がすぐに承諾したのを、春恵は不思議に思った。

涼介「よしっ、そうと決まれば早速行動に移そう!」

乙葉「ええ。」

桜子「私も手伝っわ!」

涼介「ありがとうございます。」

こうして、宇宙家の脱出計画は幕を開けた。

まず、涼介と吉長が村に残ってる人たちを秘かに公民館に集めた。
そして、乙葉が予定地である屋上へ上がると、計画を実行に移した。
涼介「よしっ、行きましよう！」

涼介の合図で60人ちかくの村人は、静かに移動を始めた。

乙葉「こちら乙葉。雪女、現在山の学校裏に潜伏中。」

吉長「了解！」

見張りの乙葉とは、無線で連絡を取り合った。

春恵「無線とか、かつこいい！」

春恵は目を輝かせた。

春美「もう、春恵ちゃんてば……。」

春美は苦笑いした。

村人たちは、涼介と吉長を先頭に、結界の一番遠いところにむかっていた。

その途中だった。

加帆「……何これ!？」

「……キヤー!!!!!!!!!!」

村の大樹の側を通った時、村人たちは、雪女に無惨にも殺された村の仲間たちの骸を見たのだった。

体は八つ裂きに斬られ、首がとnder者もいた。

気がつけば、そこら辺りは一面、積もっていた真っ白い雪が赤く染まっていた。

女に限らず男も叫ぶほどだった。

春美「ヤバいつ！みんな、走って!!」

涼介「え!？」

春美「雪女が来る!」

すると乙葉からも連絡があった。

乙葉「大変よ！雪女がさっきの悲鳴を聞いて、そっちに行ってたわ。急いで!!」

それを聞いた涼介は大きな声で村人に命令した。

涼介「走れー！！！！」

涼介と吉長だけでなく、春美と春恵も みんなを走らせた。
みんなは一斉に全力疾走で橋を渡り、スーパーの側を通り、バス停
のところで止まった。

涼介「はあっ！！」

涼介は全力で結界に穴を開けた。

吉長「早く出て！」

吉長は春美・春恵と共に、村人を外に出した。

涼介「くっ…。」

途中、穴が小さくなった。

春恵「え！？」

春美「涼介くんが限界なのよ！」

春恵「そんな…村人はまだ沢山いるのに！」

開けれる穴がそんなにでかくないので、いつきに通れるのは2人だ
けだった。

だから、後ろには行列ができていた。

桜子「雪女が来たぞ！！」

振り向ける者だけが振り返った。

雪女「逃さない！」

ヒュッ

雪女が吹雪を発生させ、霰が村人を襲った。

春美「だめー！」

春美は持っている霊力で、独自に結界を作った。

カキーン、キーン…

結界は霰を跳ね返し、吹雪から村人を守った。

雪女「何っ！？」

春美「させないっ！」

春美も意地になった。

涼介「くぁっ…」

穴はどんどん小さくなっていった。

春恵「手伝うわ！」

春恵は靈力を手に集め、小さくなる結界の端をもち、広げていった。

涼介「春恵ちゃん!？」

春恵「いいから黙って集中！」

涼介「…うん。」

穴は元の大きさに戻った。

そして、残ったのは涼介・春美・春恵・吉長・乙葉・光輝だけになった。

吉長「次は春美ちゃんと春恵ちゃんが…。」

春恵「だめっ、今手を離したら…穴が…っ。」

春美「私も…雪女を止めてないっ！」

涼介「次は光輝と吉長が出て！」

春美ちゃんと春恵ちゃんは次に…。」

光輝「…でもっ！」

その時だった。

雪女「もう怒った!!!」

雪女が本気を出してきた。

春美「キャ！」

雪女の吹雪が激しくなり、春美の結界を突き破った。

そして、春恵にむかった。

春美「春恵ちゃん!!」

涼介「危ない！」

涼介は結界から手を離して、春恵を押し倒した。

ーザン

2人のいたところに大きな氷柱が刺さっていた。

春恵「っ…!!」

春美「春恵ちゃん、涼介くん!」

春美は2人に駆け寄った。

涼介「…。」

2人は無事だったが、春美に怒りが立ち込めた。

春美「私の妹を傷つける奴は、誰であろうと許さない!!」

春美は近づいてきていた雪女の腕を握った。

雪女「なっ!」

春美「消えて…っ。消えろ!!」

春美の怒りは力へと変わり、雪女の手を浄化した。

雪女「イヤーツ!!」

春美「消えろ!!」

雪女「ギャー!!!!」

雪女の手が剥がれ、肉が朽ち、骨が溶けていった。

そしてそれは体全体に広がった。

雪女「っ…こんなことで終わらせない!!めちゃくちやにしてやるっ!!」

雪女は最後の力で呪いをかけた。

春美「!?!」

気がついたら、雪女は氷に変わっていた。その氷はあっという間に溶けて消えていった。

つかの間の休息

春美「っ…、ハアハアハアハア。」

涼介「フーフー…。」

春恵「っ…。」

3人とも、結界に穴を作れるほど力が残ってなかった。

光輝「涼介！」

光輝は涼介に駆け寄った。

涼介「バカヤロウ！何で残ったんだ！」

光輝「ほっとけないだろう！」

吉長「まあまあ…。」

結局、涼介・乙葉以外に春美と春恵・光輝・吉長も残ってしまった。

吉長「とにかく、今現在に結界に穴を開けられるほどの霊力を持っている人はいないんだ。

一度家にもどって休もう。」

涼介「だが…。」

春美「吉長くんの意見に賛成するわ。雪女は滅したけど、村に積もった雪が溶けるには当分かかりそうよ。

霊力の回復を待つには、あまりに寒すぎると思うの。」

春恵「うん、思う。」

すると涼介は立っているのが限界なのか、ふらついた。

そして、家に戻ることにはしぶしぶ賛成したのだった。

家に戻ると、乙葉ももどっていて、吉長や光輝はともかく、春美と春恵がいることに驚いた。

乙葉「なあんだ、結局残っちゃったのね。」

春美「仕方ない状況だったから…。」

乙葉「ま、いいわ。とりあえず、霊力を回復しなくちゃね。夕食を作るから、待ってて。」

そう言つと、乙葉は台所へ行った。

光輝「俺は、乙葉を手伝つてくる。」

光輝も台所へ行った。

涼介「僕は部屋で休むよ。」

2人も吉長くんも、休んでね。」

春美「はい、わかりました。」

吉長「何時に起きるとか言つててくれると、起こしにいくぜ?」

吉長はたまに兄のような雰囲気を出す。

涼介「ありがとう。でも今はいいや...。」

涼介は軽く断り、自分の部屋に行った。

吉長「そうか。ゆっくり休め。」

吉長は涼介の頭をポンツとなでた。

ドクン

春美「!?!」

また春美の頭に声が響いた。

ふたつ、

散つた怨念が集うー

春美「っ...!。」

春美に頭の痛みが襲つた。

春恵「春美ちゃん!!」

春美「だ、大丈夫。」

春恵「...とりあえず、春美ちゃんも部屋で休んで?」

春美「や、私は...。」

すると、春恵は今までよりきつく言つた。

春恵「ダメ!寝てな!!」

春美「...わかつたよ。」

春美は怒られた子供のように、シュンとして部屋へ行った。
心配な春恵は後ろからついていった。

吉長「ほんと、仲間良しだあなあ」
吉長は笑った。

春美は部屋に入ると、疲れがいつきにでてきたのか、春恵のこと
も忘れて眠ってしまった。

夢の中で、桜子が出てきた。

桜子「ひとまずお疲れ様。

松子を逃がしてくれてありがとう。」

春美「いえ。

桜子さんこそ…、雪女を浄化した時に、力を貸してくれましたよね
？」

桜子「気づいてたの？」

春美「はい。私はあの時、本気を出さないように、ギリギリの力で
対応してたので、浄化したときは驚きました。」

桜子「…そうでしょうね。」

桜子は目を細めた。

桜子「涼介の回復には、2日は必要よ。それまでは、あなたの体も
休めなさい。」

春美「わかっています。それより、ひとつだけ聞きたいことがある
んです。」

桜子「私の答えれる範囲なら。」

春美「さっき雪女は何か力を使ったみたいなんです。何に使ったか
わかりますか？」

桜子「ああ。」

ードン！

夢の外から大きな音がした。

春美「何…？」

桜子「雪女の仕掛けたものだ。」

春美「何が起ころうとしてるの？」

―スウ―

すると、桜子の身体は薄くなってきた。

春美「桜子!？」

桜子「…ふたつめの祠、南の首が壊された。封印されていた者が、また甦る。」

春美「え!？」

桜子「気をつけて…。」

桜子は消えてしまった。

そして、春美は夢から覚めた。

その幽霊、茨（いばら）

夢から覚めた春美がまず感じたのが、雪女よりも強烈な邪気だった。
春美「…あ、南の首が壊されたから。」

春美は急いでリビングに行った。

リビングに行くと、霊力が比較的弱い乙葉・春恵・吉長は、しゃがみこんでいた。

そして、霊力が全くない光輝は気絶していた。

涼介は無事な様で、光輝をソファーに寝かせた。

春美「涼介くん…、これは？」

涼介「さっき南の首が壊されて出てきた邪気が、みんなにはきついんだろう。」

僕も、立っているのが精一杯なんだ。春美ちゃんはどう？」

春美「私は…。」

―スウ…

その時春美の中に、何かが入ってきた。

春美「っ…。」

涼介「…？」

どうしたの、春美ちゃん？」

春美「私は…茨。」

涼介「！？」

春美の様子がおかしかった。

涼介「…春美ちゃん？」

春美「私は、茨よ。」

涼介「……憑依ひょういか。」

春美「そうよ。」

私の声を代弁できる人を探してたら、この子が一番しっくりきたか

ら。体、借りちゃった。」

春美の中に入った子が笑うと、春美も笑った。

涼介「…何が目的なのかな、茨。」

春美「ふふっ、お願いよ。」

私の願いを叶えて欲しいの。」

涼介「願い？」

春美はうなづいた。

春美「川辺の近くにある小学校。」

涼介「桜ヶ丘小学校！？」

春美「そう。そこに、あなたとこの子の2人が来ることが、お願いよ。」

涼介「…そこに行つて、どうしろと？」

春美「行けばわかる。」

涼介「…何？」

春美「じゃあ、頼むわね！」

春美は目を閉じた。

―スウ―

春美から茨が抜けた。

涼介「…茨？」

春美「…え？茨？？」

涼介「春美ちゃん！」

春美「何？」

元の春美に戻っていた。

春美「今…私…何が？」

涼介は、今あった事を春美に説明した。

春美「…じゃあ、その茨ちゃんは桜ヶ丘小学校に来てって言ったのね。」

涼介「うん」

春美「で、涼介くんはどうするの？」

涼介「んゝ…。」

春美「私は行く！」

涼介「…危険かもしれないんだよ？」

春美「封印に関係あるかもしれないし…気になる。」

涼介「…。」

涼介は考えた。そして…

涼介「わかった。僕も行こう！」

春美「…ありがと。」

涼介は行く事を決めた。

小さな鈴

春美と涼介の2人は、倒れている春恵・光輝・吉長・乙葉を家に残して、桜ヶ丘小学校に向かった。

小学校の前に行くと、中から異様な数の邪気が溢れ出ていた。

涼介「っ……」

さすがに涼介も苦しさを感じてきたようだ。

春美「涼介くん……」

しかし春美は特に影響を受けていないようだった。

春美「……涼介くんは、ここにいて。中には私だけが入るわ!」

涼介「なっ……!?!」

春美「強い邪気で、立つてるのが精一杯なんですよ?」

涼介「だが……!」

春美「いいから、ここに残って!!私は1人で大丈夫だから。」

春美は涼介を軽く押した。

すると涼介は立っているのがまもなく、バランスがとりにくくなっていた。

涼介「う……わかったよ。」

涼介は、承諾した。

春美「ん。じゃ。」

春美は小学校の中に入った。

中に入っすぐの玄関ホールには、人を襲うこともできない弱い霊が集まっていた。

彼らはただ春美が奥に進んで行くのを見ているだけだった。

ガサゴソ……

春美は首から下げていたお守りの中から、小さな鈴を取り出した。

春美（今日もお世話になります。）春美はこれまでの霊を成仏する

とき、いつもではないが、その鈴に頼っていた。

リン…

美しい鈴の音がする。

春美は鈴を大事に持って奥へと進んだ。

開戦

学校の廊下の窓は、段ボールがガムテープでベタベタに張られていて、光が遮られて薄暗くなっていた。

教室の窓も同じようになっていた。

春美は、邪気を一番強く感じるところへ向かった。

そこは、多目的室とかかれてあった。

春美「ここ…。」

ーガラガラ…

春美はドアを開けた。

すると、中には沢山の幽霊が集まり、音楽をながしてパーティーの様なことをしていた。

春美「！」

春美は、パーティーに夢中な幽霊たちをすり抜け、奥で集まる邪気の元へ行った。

「おや、生きている人間じゃないですか…。」

春美は奥の幽霊に気づかれた。

奥の幽霊が話すと、みなダンスや食べることを止めて、春美を見た。「ここが、どういう場所かわかっているのか？」

春美「わかっていますよ。」

春美は答えた。

「わかっているのなら、ここに来るべきでなかったな。来てしまったら、我々はあなたを排除するしかない。」

春美「勘違いしてない？」

排除するのは私！

されるのはあなたたちよ！！」

「なんと、これまた気の強い女がきたもんだ。」

「そんな事、できると思っているのか？」

腕に自信のある幽霊が前に出た。

春美「できるわよ！」

春美は顔を上げたまま腰を低めた。

「簡単にはさせませんよ。」

1人の幽霊がまた一步出て、炎を操り春美に攻撃を先にしかけた。

ーボオウ！

春美「おもしろい。」

炎は春美の周りを回り、春美の死角を狙った。

春美「おっと…。」

春美はクルツと体を回転してよけた。

「逃げてても無駄だ！！」

ーボオウツ！ボオウツ！

複数の炎が春美の足元に現れ、春美の両足をつかんだ。

春美「熱っ！！」

春美はその場で足を上げたり跳ねたりしたが、炎は消えなかった。

春美「ったく…。」

春美は霊力を体から放出した。

ーホワァッ！

その霊力は炎を消し去った。

「ほおう…なかなかの霊力。」

春美に休憩の時間外は与えられず、すぐに次の攻撃がきた。

ーゴオオオオ！！

炎の威力が強くなった。

「さあ、次は消すことができるかな？」
炎を操る幽霊は笑った。

激戦

春美の目の前に、大きな炎の塊が現れた。

春美「消し去るッ！」

春美は霊力を高めた。

そして、動こうとした時。

ーギュッ！

春美「っあ！？」

春美は動いた瞬間に首に細いロープ状の様なものが巻かれたので、自分の勢いで自分を苦しめる結果になった。

ーギュ…

ロープを使う幽霊は、春美の首を締め付けた。

春美「っ…」

春美は抵抗した。

「終わりだ。」

春美「！」

春美は手に霊力を集め、指先の一点に集中した。

ーブイイイイン

霊力は実体化し、細長い刃が現れた。

刃は粒子サイズが細かく振動しているので、ロープを切り裂くことができた。

春美「ゲホッ…ゲホッ…

ゴホッ…ゴホッ…」

春美は地面に転がり落ちた。

ーシュツ！

息を整える春美の頭のすぐ近くにの地面に、ナイフが突き刺さった。
春美「！？」

春美は上を見ると、数本のナイフが春美にむかって落ちてきていた。
春美はすぐに寝返りをうち、その勢いで、立ち上がった。

ーシュツ、シュツ、シュツ、

ナイフは春美が転がっていたところに突き刺さった。

「よく、よかったですね。」

春美「ハア、ハア、ハア、ハア…。」

「でも、もうよけませんよ。」

その幽霊はナイフをどこから出し、両手に持った。

そして、器用に回し始めた。

春美「っ…。」

春美はナイフだけでなく、全ての幽霊に注意しながら動いた。

春美が幽霊に近づくと、幽霊はナイフを刺そうとしてきた。

ーシュツ！シュツ！

春美は大きな動きはせず、必要最小限によけた。

「ちょこまかと…」

ーすうつ

春美「！？」

ナイフの反対側からロープが飛んできた。

それを春美は左によけた。

すると、よけた方向には炎を持って待ち構えていた幽霊がいた。

春美（誘導された！？）

この幽霊たち、知恵がきく…）

春美「ハアアアアア！！」

春美は高めた霊力を放出した。

ーボオ、ボオオオオ！！

しかし、一瞬炎が弱まっただけで炎は燃え続けた。

春美「消せない！？…イヤアアア！！」

炎は春美を燃やした。

激戦（2）

炎に包まれた春美の体は、既に熱さを感じることもできなかった。汗すら出ず、皮膚は焼け焦げ、血が蒸発していった。

春美「っ……」

もう、話す力さえなかった。

春美（私……ここで、死ぬの？。

……い、嫌だ……。死にたく……。ない。）

そう思った時だった。

ーガタン！

部屋のドアが開いた。

涼介「春美ちゃん！」

涼介が、春美の霊力の異変に気づき、中に入ってきていた。

春美（り……涼介……くん？）

涼介は、春美を助けようと、幽霊に立ち向かった。

涼介「よくもっ……！」

宇宙家秘伝、滅殺術！」

涼介は、中指を下唇につけて、小さな声で素早く術を唱えた。

「何！？うわぁ……！！！」

1人の幽霊が悲鳴をあげて、白い煙を上らせながら、消えた。

涼介の術が効いているようだ。

「こいつも霊能力者か……！」

「やっちまえ！」

幽霊たちは涼介を囲んだ。

春美「りよ……すけ……くん！」

春美は手を伸ばした。

「お前は今すぐ死ね！」

炎を操る幽霊は、炎の威力を上げてきた。

春美（た、助け…ないと！）

春美は鈴を取り出した。

ーリイン…

涼介（鈴の音？）

春美（鈴よ…、私の願いを…叶えて！

私と涼介くんを…助けて！！）

ーリイン！

すると春美の周りに強力な結界が現れて、炎から春美を守った。

そして、涼介には霊力の補充が与えられた。

涼介「！？」

涼介は霊力が急に戻ったので、驚いた。

春美は結界で身を守られるだけでなく、炎で焼け焦げた体中の皮膚を癒された。

春美「っ…涼介くん！」

ーパァン！！

春美は涼介を囲む幽霊を消し去った。

春美「鈴よ、私に力を！！」

ーチリーン…リイン…リー…ン

鈴が、幽霊たちの頭の中で響いた。

「っ…うわぁ〜！」

幽霊たちは頭を抑えて、嘆き苦しんだ。

「グアアアアア！」

頭が割れるように痛い――！

「痛い痛い痛い――！」

――リーン……チリーン……リーン

鈴が鳴り止むことはなかった。

春美「消え去れ――！」

春美の一言で、幽霊たちが一斉に消え散っていった。
灰一つ残らなかった。

涼介「……春美ちゃん。」

広い教室に、二人だけが立っていた。

春美「村中の邪気が消えた――。」

これで、みんな目を覚ますね。」

春美は涼介の元に近寄った。

春美「大丈夫？ 涼介くん。」

涼介「僕は……それより春美ちゃんは？」

春美「大丈夫よ。」

涼介「……でも、霊力が減って。」

春美「私は鈴から霊力の供給があるから、使いすぎて死ぬことはないの。」

涼介「……そう。」

春美「さあ、家に帰ろ……？」

涼介「うん……。」

涼介は、うなづいた。

茨の願い

2人が家に戻ると、春恵・吉長・乙葉・光輝の4人は目覚めていた。

春美「春恵ちゃん！」

春恵「春美ちゃん！」

春美と春恵は無事を喜んだ。

乙葉「何か、村中に広がってた気持ち悪いものがなくなってる。」

乙葉は、春美と涼介を見た。

乙葉「2人がやってくれたの？」

涼介「まあ、ほとんど春美ちゃんが…ですけど。」

乙葉「すごい…すごいわ！」

すると、春恵は春美をもう一度見た。

春恵「もしかして、あの鈴に力を？」

春美「うん。」

春恵「…そう。」

春恵はつぶやいた。

ー スウツ…

春美「!？」

春美の中に、また何かが入った。

ー フラ…

春美は気を失い、春恵にもたれ掛かった。

春恵「春美ちゃん？…春美ちゃん！春美ちゃん！」

春恵は春美を揺すったが、春美は目を覚まさなかった。

涼介「春美ちゃん！」

乙葉「春美ちゃんをソファーに…。」

乙葉の指示で、春恵は春美をソファに寝かした。
そして医師免許を意外にも持っていた乙葉が、春美を診察した。

乙葉「……………」。

大丈夫よ。脈は通常、呼吸もしてる。あえて言うなら、前より靈力が弱まっている。

だから、これは靈力の休息なのかもしれないわ。」

涼介「休んでいれば、いいんですね？」

乙葉「そうよ。」

春恵「よ、よかった…。」

ーグウ… キュルルッ

安心すると、春恵のお腹が鳴った。

春恵「うおっ！」

春恵はお腹を抑えた。

乙葉「ふふ、遅くなったけど、夕食にしましょうね。」

乙葉はキッチンに、冷めた料理を温め直しに行った。

もう、朝だった。

その頃、春美は春美の中に入った幽霊、茨と2人だけで話していた。

春美「あなたが茨ちゃんね。

初めまして、春美です。」

茨「初めまして。

村を救ってくれてありがとう。」

春美「いいえ。」

茨「…あなたになら、この先も村を任せることができそうね。」

茨は小さな声でつぶやいた。

春美「…？」

茨は春美の手を握った。

茨「私はこの村で生まれ、この村で死んだ。

ここでの記憶は10年とわずかだったが、この村は、私の大切な場所なの！」

春美「…。」

茨「だから…だから、これからもこの村を守って!!」

茨の強い願いだ。

春美「…うん。守るよ…私もこの村が好きだからね。」

春美は微笑んだ。

茨「ありがとう。」

すると、茨の体は透けていった。

茨の未練は断たれ、成仏していったのだ。

春美「…約束は必ず守る！」

まずは、封印をし直さなくちゃ。」

春美は祠の封印を決意した。

封印の方法

茨が成仏していった後に、桜子が現れた。

春美「…桜子。」

桜子「さすが、春美ちゃんね。

坦々と封印してたモノを消していくんだもん。ひよっとしたら、宇宙家最強なんじゃない？

私も最強だと言われてきたのに、春美ちゃんは私以上でビックリしたわ。そろそろ、”最強”も襲名時期なのかもね。」

桜子は笑った。

春美「気楽ね。私は死にかけたのに…。」

春美は少し怒っている様だった。

桜子「でも助かったわ。鈴のお陰でねっ！」

春美「何で…鈴のこと、知ってるの？」

桜子「…覚えていないの？」

春美「何のこと？」

春美は頭を傾けた。

桜子「…そう、覚えてないのね。」

桜子はずぶやいた。

春美は聞き取れなかった。

春美「？」

春美が聞き返しても、桜子は答えなかった。

春美「…まあ、いいわ。」

春美は口をとがらせた。

だが何かを思いつき、桜子を見た。

春美「ねえ桜子、聞きたいことがあるんだけど…。」

桜子「何を？」

春美「宇宙家最強と言われた桜子なら、祠の封印の仕方、わかるでしょ？私に教えて欲しい。」

桜子「…祠の封印をし直す気？」

春美「うん。これからも封印が壊れていけば、封印されていた者全てを滅しなくてはならなくなるでしょ？……できれば、私は人間じゃなくても、その命を奪うことはしたくないの。」

桜子「ふう〜ん、いいわよ。」

桜子は案外簡単に返事を出した。

桜子「あ、でも…。私は封印の力を使ったことがないの。だから、覚えてる方法が曖昧なんだ。

封印の方法は、家の倉の中にあるから、自分の目で見て覚えて？」

春美「はい。」

桜子「確か、巻物だったはずよ。

……封印、頑張つてね。」

桜子は手を振って消えていった。

春美は目が覚めると、すぐに倉を探した。

そして、中庭に大きな倉を見つけた。

春美「でか…。」

春美は倉を見上げながら、扉についている古い錠に触ろうとした。

光輝「何してんの？」

その時、たまたま渡り廊下を通っていた光輝が春美に気づき、近づいた。

春美「…えっと…。」

光輝「中の物に興味あんの？」

でも、無駄だ。その錠は、鍵穴が錆びてて鍵が入らないんだ。

もう40年も開いてないらしいぜ。」

春美「…そうなんだ。」

春美は倉を見た。

春美「ねえ、開けれないって事は、もし中に入れたらみんなの不便が1つなくなるのよね？」

光輝「…だろうな。中には高い値打ちの掘り出し物がけっこーある

って言つて……て、もしかして開けるのか？」

春美「うん。みんなには何の問題もないよね？」

光輝「あ、ああ……。」

すると、春美は両手で錠を握り、霊力を籠めた。

ーガチャ……

錠は鈍い音を出し、引き抜くことができた。

光輝「スゲエ……。」

春美「こーゆーのは、少し力入れるだけでいいんだって。」

光輝「へえ、誰か言つたのか？」

春美「昔にね……。」

ん、あれ？誰から聞いたわけ??」

春美は思い出せなかった。

ーギイイイイイ

春美は重い扉を押し開けた。

宇宙葉嗣（そらノはつぐ）

春美と光輝の2人は倉の中にゆっくりと入った。

そして春美は巻物を探しに奥に進んだ。

また光輝の方は中のある物に興味をひかれ、扉近くの物を、物色した。

春美は奥に行くと、巻物がなん本もある棚を見つけた。

春美「こんなに…」

春美はすぐ手の届くところにあつた巻物を手にして、中を見た。

「スルル…」

春美「これは家系図だわっ!？」

代は、おばあちゃんたちで止まってる。」

春美は家系図に、赤で囲まれている名前を見つけた。

春美「宇宙葉嗣そらのはつぐ?」

光輝「葉嗣は、封印をした先代らしいよ。」

光輝が横から顔を出した。

春美「この人が…」

光輝「宇宙家最強と言われた桜子と同等の力を持っていたらしいよ。」

春美「…そんな強い人が封印したのに、解けてしまってるのね。」

光輝「ああ…」

そう言つて、光輝は別の場所を物色しだした。

春美は巻物を戻し、別の巻物を手に取ったが、量が多く全てに目を通す気になれなかった。

なので春美は巻物のタイトルを1つずつ見ていった。

”薬草のすすめ” ”妖怪図鑑” ”妖怪の滅し方” ”霊力の操作” 等々の巻物があった。

春美「ん？」

春美は”霊力の操作”の巻物を見た。

そこには、力を籠めて鍵を開ける方法が書かれていた。

春美「あ、さっき使った方法だ。」

春美はその続きも見た。

そこには、霊力の奪い方や与え方が書かれていた。

春美「これで桜子は私から力を吸いとったんだ…ん？」

霊力の籠め方？」

春美は続きを見た。

春美「物に霊力を籠めることが可能…。ふうん、こんなのもできるんだ。」

春美は巻物をもどした。

ーコト…

巻物の棚とは違う場所から物音がした。

春美「？」

音がした方に行くと、”秘伝書”と書かれた紙が貼ってある木箱を見つけた。

春美「秘伝書？」

春美はその木箱を、箱の置いてある棚から持ち出した。

春美はふたを開け、中の巻物を見た。

”封印方法”と、書かれていた。

春美「これだわ！？」

春美は巻物を広げた。

そこには、封印するための順序が書かれていた。

”其の一：封印する器を用意するべし”

春美「器…。祠ね。」

” 其の二：持ち合わせている霊力を全て注ぎ籠めるべし ”

春美「これは…鈴があれば、なんとか。」

” 其の三：封印する妖怪を瀕死に追い込み、器の側に置くべし ”

春美「あ…雪女とかは消し去ったから、封印できない。」

でも…封印し直すから、現在進行系でされてるのは大丈夫よね？」

春美は独り言を言っていた。

” 其の四：封印する妖怪の妖力を注ぎ籠む霊力と練り合わせながら、器に入れるべし ”

春美「妖力を霊力と練り込む…？」

春美はいまいちよく分かってなかった。

” 器の外側から内側に渦を描くように練り込むべし ”

春美「外から…？あ、そうか。」

春美は理解した。

光輝「目当ての物は見つかったか？」

光輝が気分良く春美のところにやって来た。

春美「…うん。光輝くんは何を見つけたの？」

すると、光輝は腕を出した。

腕には、七色に光るブレスレットを着けていた。

光輝「綺麗だろ？」

春美「うん。」

2人は倉の外に出た。

春美は空を見上げた。

春美「…また、邪気が強まってる。」

光輝「ふうん。」

邪気を感じない光輝は、どうでもよさそうだった。

春美「祠の封印が解けかかっている！？早く封印をし直さなくちゃ！」

光輝「封印をし直す…？」

春美「うん。行ってくる！」

光輝「今すぐか？もう夕方だぞ！！」

春美「解ける前に行かなきゃ!!」

春美は走り出した。

光輝「春美!？」

光輝は追いかけた。

再封印！

春美は光輝と2人で桜ヶ丘小学校の祠、西の首に行った。

すると西の首の祠は、ひびが入り、そのひびから忌々しい邪氣がでていた。

光輝「何だ…？気持ち悪っ！」

光輝は、眉をひそめた。

春美（靈力がなくても感じるの？

まだ封印は解けてないのに。

…封印されてるモノがすごい邪氣を持っている？）

春美は祠の前にしゃがんだ。

そして、スイッチを切り替えた。

春美「今から祠の封印をし直すよ！」

春美はありったけの靈力を、祠からでている邪氣と練り合わせ、祠の外側から渦を描くように中心に押し込んだ。

ーググググググググググ…

すると、祠から封印を阻止しようとする邪氣が、怪しい音を発しながら外に出てきた。

春美（何！？この強い邪氣…）

こんなの私だけで抑えられるわけないっ！！）

春美の額に汗が流れた。

光輝「春美？」

春美「…：ごめん、ちょっと黙ってて。集中しないと、中の奴に負けそうだから…。」

春美は口を閉じ、真っ直ぐに祠を見た。

光輝「おうっ！」

光輝は春美の奮闘する後ろ姿をしっかりと見守った。

[illegible]

しかし、祠からでている邪気はどんどん大きくなっていった。

春美「……くっ……!!」

春美は邪気に押し出されそうになったので、地面に膝をつき、踏ん張った。

ー
ズリ
...

だが、祠から押し出そうとする力に春美の踏ん張りは歯が立たず、春美の体は、地面にその跡を残して祠から遠くに下げられていった。

光輝「春美っ！！」

光輝は春美の背後にまわり、背中を押した。

春美「!?… 光輝くん？」

春美は驚いて、後を振り向きそうになった。

光輝「振り向くな！！体は俺が支えるから、お前は前だけを見て集中しろ！！」

春美「うんっ！」

春美にとって、光輝は心強い存在になった。

ー
ググググググググ…

春美の力は強くなっていた。

「ござかしい」

春美・光輝「!？」

祠から低く野太い声が聞こえた。

光輝「…今の声って？」

春美「封印されてる奴よ!!」

すると、祠から大きな手がゆっくりと出てきた。

春美「封印が…破られていつてる!」

手が出てくると、一層に邪気も増した。

光輝「く…苦し…。」

光輝の力は弱まった。

春美「光輝くん!？」

光輝（くそっ…俺は何の役にもたてないのか!?!…誰かの役にたちてえ!!）

ーキラッ

すると、光輝の願いに反応したかのように、光輝の着けていた七色に光るブレスレットが、輝きだした。

春美（そのブレスレット、もしかして霊力が籠められたものなんじゃ…。）

春美は、さっき倉で見た巻物に思いあたるところがあったので、思い出した。

「このっ、生意気な…。」

ブレスレットの輝きは、光輝の体を守るだけじゃなく、春美にも力を与えた。

春美「力が…みなぎってくるよ!」

光輝「ああ。」

春美「これならいける!

できるよ、封印!!」

そう思った時だった。

「できると思っなっ!!」

小娘共っ！！！」

祠から今までにない、ものすごい邪気が放出された。

そして、祠から手だけでなく、腕までも出てきた。

春美「あ、キヤアアッ！！！」

光輝「うあっ！？」

そね膨大な邪気に、2人は追いやられ、校庭の隅にあった祠から遠く離れた校舎まで飛ばされた。

ーピキッ…パキ、ボキ…

祠のひびが広がった。

そして、祠から大きな頭が出てきた。

頭には、2本のいかつい角があり、真っ赤な長い髪が祠から出た瞬間に、風になびいた。

光輝「…鬼！？」

そう、出てきたのは巨大な鬼だった。

ーバキーツ！！

鬼が祠から完全に出ると、祠は崩壊していった。

春美はがく然とした。

春美「…封印、しきれなかった。」

春美の声は、絶望を示していた。

初めてのケンカ

春美と光輝は、鬼が完全に復活する前に、その場を逃れた。
2人は家に戻った。

涼介「おかえり。」

涼介が腕を組んで2人を迎えた。

春美「涼介くん…。」

春美は封印のことを説明しようとした。

涼介「部屋で春恵ちゃんが横になってるから、行ってあげて？」

春美「うん。」

春美は部屋に行った。

春美が行くと、涼介は光輝を見た。

涼介「お前とは話がある。説明してもらおうか。」

光輝「ああ…。」

光輝は涼介に連れられて行った。

鬼が出てきたことで、霊力の弱い乙葉・春恵・吉長たちは邪気に負けて自分たちの部屋で、横になっていた。

春美は春恵のいる、2人の部屋に入った。

春美「春恵ちゃん！」

春美は横になっている春恵の側に駆け寄った。

春恵「…春美ちゃん。どこに行ってたの？」

みんなで探したけど、見つからないから…心配した。」

春美「心配かけてごめん。」

それと、ごめん…。」

春恵「何が？」

春美「西の首の封印、できなかった。」

春恵は窓の外を見た。

春恵「じゃあ、この強い邪気は封印されてた妖怪の…。」

春美「うん、鬼が出てきた。」

すると、春恵は起き上がった。

春恵「そんな危険な場所に…1人で行ってたの？」

春美「ううん、光輝くんがついてきてくれた。」

春恵「違う。霊力があつたのは春美ちゃんだけ…？」

春美「あ、うん。そうだね。」

春恵「…。」

すると、春恵は黙りこんだ。

春美「春恵ちゃん？」

春恵「…そんな危険な場所に行くなら、せめて霊力のある人と…。」

春恵の声はだんだん小さくなった。

春美「何？」

春恵「私にも…一応、弱いけど、何の役にもたたないかもしれないけど、霊力がある。」

春恵のいつもと違う様子に、春美は戸惑った。

春美「何？どうしたの、春恵ちゃん。」

春恵「私、春美ちゃんのお姉ちゃんだよ？…生まれてきたのはほんのちよつとの差だけ。」

春美「何が言いたいのか？」

春恵はその言葉に、込み上げていた想いが爆発した。

春恵「…だからっ私は、もっと頼ってほしいのっ！」

春美「は？」

春恵はその勢いで普段我慢してることを言った。

春恵「いつもいつもいつも、

春美ちゃんは自分勝手すぎる！

強い霊力があるからって、…独りで何でもできると思わないで…！」
春美「そんな、思ってたんか…！」

春恵「…思ってるから、独りで行っちゃうんでしょ？」

雪女のと時も、悪霊のと時も！」

春美「だって、あれもそれも私にしかできないことだから…」

春恵「ほら、自分勝手！」

雪女のと時は、私も吉長くんもいたじゃん。みんなで力を合わせれば、春美ちゃん1人に負担かけなくていいじゃん。」

春美「でも…」

春恵「悪霊のときは涼介くんがいた。だけど、春美ちゃんは自分から突き放して、独りで行ったんでしょ？」

春美「そんなつもり…」

春恵の勢いは止まらなかった。

春恵「今回も、みんなで行けばよかったのよ！」
すると、今度は春美が怒った。

春美「違うつつ！！私はみんなを守ろうと思ったから…」

春恵「私だって思ってる！！」

だけど、みんなも思ってる！！

守りたいなんて思ってたいつ！！」

春美と春恵の声は、どんどん大きくなった。

春美「そんなことわかってる！」

春恵「わかってないよ！！」

春恵はとうとう叫んだ。

そして、1度落ち着こうと深呼吸した。

春恵「…春美ちゃんがそこまで石頭だと思ってなかった。」

春美「私だって…」

春恵「春美ちゃんの馬鹿！」

もう知らないっ！！」

そう言つと、春恵は立ち上がって部屋から出ていった。

春美「…春恵ちゃんの馬鹿！」

春美は床を蹴った。

記憶

封印で疲れきった春美は、春恵が部屋に戻ってくるのを待っていたが、いつのまにか眠ってしまった。

春美は、夢を見ていた。

~~~~~「お母さん」

声が聞こえた。

春美（ん…、ここは？）

春美の目の前には、大きく立派な宇宙家の門があった。

春美（あれ？私、部屋にいたのに。）

「お母さん」

不思議に思っていると、後ろから小さな女の子を連れた母が、歩いてこちらにやって来ていた。

春美（あ、お母さんっ

……………！？）

春美は両手を口に当てた。

声が出せないのだ！

「ねえ、お母さん。ここがおとまりするおうち？」

母「ええ。」

母と小さな女の子は、まるで親子のような会話をしていた。しかし春美には、この光景は微かに見覚えがあった。

春美（…。）

春美は周りの景色をじっくりと見渡した。

空は夜のはずだが、太陽が出て明るい。

周りの木々も、緑が目立ち、うるさくセミが鳴いてるはずだが、葉は落ち、代わりに白い物が積もっていた。

春美（…。）

最後に、春美は小さな女の子を見た。

「お母さんっ」

女の子は母と手をつなぎ、母が振り向くと、幸せそうに笑った。

春美（この子…私だ。）

それに気づいた時、家の中から今よりも若い乙葉が出てきた。

乙葉「長旅お疲れ」

和葉、春美ちゃん。」

乙葉は確かに、女の子に”春美”と言ったのだ。

…そう、これは8年前

春美に霊力が目覚めて約1年が経った頃だ。

母は手に持っていた、少し膨らんだ手提げを乙葉にわたした。

和葉「じゃあ、よろしくね。」

そう言つと、母は小さな春美の目の高さまでしゃがんだ。

和葉「いい子にしてるのよ？」

「うんっ」

頭を撫でられ、春美は上機嫌だった。

和葉「じゃあ。」

乙葉「気をつけてね。」

和葉は春美を残し、待たせてあったタクシーに乗った。

「いつてらっしゃい」

小さな手を大きく振ると、母もタクシーの中から手を振り替えた。

春美（私、一度ここに來てた。）

小さな春美と乙葉が家の中に入っていくので、春美もついていった。

「乙葉さん、誰ですか？この子。」

廊下を歩いてると、小さな男の子が話しかけてきた。

乙葉「春美ちゃんよ。」

3日間、ここにお泊まりするのよ。仲良くしてあげてね。」

「はい。」

小さな男の子は、春美に手を差し出した。

「僕は涼介。」

「春美…。」

「あっちにおもちゃがあるから、あっちで遊ぼう！」

「うんっ」

小さな涼介は、小さな春美をリビングに連れて行った。

春美（あれが、涼介くん。

私と昔会ってた…。何でこんなこと、忘れてたんだろう？）

ーチラ…

春美（！？）

リビングに連れていかれる一瞬、小さな春美と春美は目があった。

だが、小さな春美はすぐに前を向いて何事もなかった様に、涼介と行った。

春美（びっくりしたあ…。

でも、確かに目が…。）

ーパッ！！

その瞬間、周りの景色が一変した。

春美は、どこかの山の中にいた。

## 記憶（2）

春美（ここはどこ？）

春美は慌てて周りを見渡したが、見たことのない場所だった。

「ここは裏山です。」

春美（！？）

どこからか声が聞こえた。

声の方には、小さな春美がいた。

春美（私が見えてるの？）

「はい、ずっと…」

春美は声が出せないのに、小さな春美には言いたい事が伝わっていた。

「春美ちゃん？こつちに来て！」

小さな涼介の声だ。

「はいっ」

小さな春美が涼介の方に行ったので、春美もついていった。

その先には、見たことのない祠があった。

春美（あれ？知らない祠だ。）

祠は木々の奥の目立たない草影にひっそりとたたずんでいた。

「ここには宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪が2つ封印されてるんだって。」

小さな涼介は、舌足らずな口調で難しい言葉をしゃべった。

「そらのはづく？」

小さな春美にはわからない単語だった。

「うん、宇宙葉嗣。」

「この祠は”中の首”って言って、他の祠よりトクベツなんだって。」

「ふうん。」

春美には、説明されてない祠だった。

春美（…）中の首”の祠の話なんて、聞いてない。  
宇宙葉嗣が最も苦戦した妖怪？

一体何が封印されてるんだろう。）

春美が興味津々だったのを、小さな春美は気づいていた。

「見てみる？」

小さな春美は祠に触ろうと、手を伸ばした。

春美（！？）

その時春美には何かを感じたが、小さな涼介と春美は気づいてない様だった。

春美（…ダメ、触っちゃダメ！！）

「え？」

春美の想いは、小さな春美にちゃんと届いていたが、遅かった。

ーピト…

小さな春美の手は、祠に触れていた。

ーシユル…

祠から邪気が少し出た。

「あゝ？」

邪気は、小さな春美の体に巻き付いた。

ーシユーン！！

「キヤー！！」

「春美ちゃんっ！」

邪気は、小さな春美を祠に吸い込んだ。そして、春美を助けようと

した小さな涼介も、祠に吸い込まれてしまった。

### 記憶（3）

小さな春美と涼介が祠に吸い込まれた後、また光景が変わった。

今度は、四方八方が真っ暗で、何も見えなかった。

春美（…何が起こったの？）

春美は理解できていなかった。

春美（…き、気持ち悪い。）

春美は手で口をふさいだ。

周りの邪気は、春美にも不快感をいだかせるほどの強さで、吸い込むと人体に被害がでるレベルだった。

春美（…これも記憶の続き？

8年前にこんなこと、あったっけ？）

こんな暗闇の記憶は、春美にはなかった。

ーソワツ…

春美（…？）

暗闇の奥から、微弱な霊力が流れてきた。

春美はその方向に向かった。

だんだんと、霊力が強く感じてくると、春美には子供の泣き声が聞こえてきた。

春美（私…それとも涼介くん？）

春美はうずくまっている子供の姿が見えた。

それは、小さい春美だった。

春美（大丈夫？）

春美は駆け寄った。

「っ…うわぁんっ！こ、こわいよぉうー！！」

小さな春美の側には、涼介が倒れていた。

涼介も気絶する位の邪気なのだ。

春美（大丈夫よ、泣かないで。）

春美は小さな春美を元気づけようと、頭をなでようとした。が。

―スウ！？

春美の手は、小さな春美には届かなかった。いや、触れることができなかった。

春美（！？

私は干渉してはいけないの…？）

春美は小さな春美を見た。

そして、優しい声で話しかけた。

春美（泣かないで、怖くないわ。

一緒にここからでましょ？）

小さな春美は鼻をすすって、うなづいた。

そして小さな春美が涼介を引きずって、その空間を移動しまわった。しかし、出口は見つからなかった。

「…無駄だ。お前たちは完全に捕らえた。逃がさない。」

闇の中を低くこもった声が響いた。

「誰！？」

小さな春美はビクツと肩を縮めた。春美はそれに気付き、小さな春美の前に立った。

春美（私が、この子たちを守らなくちゃ…）

―いつもいつもいつも、

春美ちゃん自分勝手すぎる！

強い霊力があるからって、…独りで何でもできると思わないで！！

春美（！？）

春美の中に、春恵の言葉がよみがえった。

「キヤー！！」

春美（！？）

小さな春美の悲鳴で、春美は我に返った。

春美（どうしたの？）

すると、小さな春美は震えた手で、ある方を差した。

春美（！？）

その方を見ると、大きな黄色い目が2つ、じっとこちらを見ていた。

「…お前、喰らいがいのある霊力だなあ…。」

目はギロツと小さな春美を見た。

春美（させないっ！）

春美は霊力を籠めようとしたが、霊力は集まらなかった。

春美（…力が発動しない？

そんなつ、今必要なのに！）

暗闇から出てきた、鬼以上の大きな手が春美を通り抜けて、小さな春美を握りつぶそうとした。

「イヤ！！」

ーチリイン…

その時、小さな春美の前にいきなり鈴が現れた。

春美（！？）

鈴は、霊力で結界を作り、大きな手が小さな春美に触れるのを防いだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1414x/>

---

鈴の音

2011年11月10日16時04分発行